

3月講演会の報告

『邪馬壹(台)国は九州にあった』

～博多で見つかった倭弥呼の宮都～

3月9日、ルナ・ホールにて、元大阪府立大学理事・講師の正木裕氏による「邪馬壹(台)国は九州にあった」と題した講演が行われました。最新の科学的分析に基づき「1里=約75m」とする短里説を用いて魏志倭人伝の行程を再計算し、博多湾岸を所在地とする考察は非常に説得力のある内容で大いに知的好奇心を刺激されました。また、二倍年暦による年代復元や当時の文字使用の可能性など、多角的な視点から日本古代史の謎に迫る解説があり、歴史のロマンを深く再認識できる貴重な機会となりました。参加者数は154名、担当は企画G、38期でした。講演の要旨は次のとおりです。

本講演では、3世紀頃の日本列島に存在したと中国の史書『三国志』魏志倭人伝に記されている「邪馬壹国」（一般には「邪馬台国」という）と、その女王「倭弥呼」について、最新の研究成果を踏まえながら述べることにします。

邪馬壹(台)国は日本古代史最大の謎の一つとされ、その所在地をめぐって長年にわたり議論が続いています。現在までに候補地は全国で50か所以上のぼるとも言われていますが、特に有力な説としては、近畿地方に存在したとする「大和説」と、北部九州に存在したとする「九州説」の二つが知られています。この論争は江戸時代から存在し、新井白石が大和説を唱え、本居宣長などが九州説を支持したとされています。さらに近代に入ると、東京大学の白鳥庫吉(1865-1942 東洋史学者、北九州説)と京都大学の内藤湖南(1866-1934 東洋史学者、畿内大和説)の間で大きな学術論争が展開され、邪馬壹(台)国論争は日本史研究の重要なテーマとなりました。

邪馬壹(台)国を考えるうえで最も重要な史料は、陳寿(233~279)の記した歴史書『三国志』の中の「魏志倭人伝」です。この記録には



邪馬壹（台）国の女王倭弥呼が西暦 238 年に魏に朝貢し、皇帝から「親魏倭王」の称号と金印、銅鏡などを授けられたこと、240 年には魏の使者が倭国に派遣され、倭弥呼の宮廷を訪れたことが記されています。そして、魏志倭人伝は、実際に倭国を訪れた使者の見聞録をもとに、帯方郡（当時の中国の出先機関）から倭弥呼の都までの道のり（行程）、邪馬壹（台）国の文物・風俗などが記されたもので、信頼性の高い史料だと考えられます。

魏志倭人伝に記す行程と距離について、実測約 300 km の韓国の幅を 4 千里（1 里約 75m）と記し、これは、地球の大きさと天文学書『周髀算経』をもとにした近年の計算（1 里約 76～77m）からも裏付けられています。そこから、帯方郡から 12000 里（約 900 km）で、半島南端からなら 5000 里（約 370 km）と記す倭弥呼の都は北部九州内にあることが確実だと考えられます。



また、20 世紀末に発見された、前漢時代紀元前 186 年の律令から、魏使は陸路を牛車で移動し、一日の行進距離は約 300 里・約 25 km であることが確認され、さらに、当時の船の航行能力も 1975 年の古代船「野生号」や 2005 年の「大王の棺」実験航海から 1 日 500 里・約 40 km だったと推計されています。

そして魏志倭人伝に記す道のりを、こうした研究成果をもとに計算すると、帯方郡から邪馬壹（台）国まで「海路（水行）約 10 日、陸路（陸行）約 1 月」との記述が正確だったと理解できます。

また魏志倭人伝に記す鉄・絹・半島と同じ単位の石権（秤の重り）・文書外交を示す「硯」なども北部九州、特に博多湾岸地域に集中出土します。そして、大和の箸墓は、「径百余歩の円い塚」と記す倭弥呼の墓と合わず、さらに、最新 2020 年の炭素同位体年代測定でも 4 世紀の墓の確率が高くなりました。また、畿内に多い三角縁神獸鏡も、鉛の同位体分析で国産の可能性が高くなり、福岡に集中する漢鏡が倭弥呼の鏡の候補として浮かび上がっています。遺跡では博多駅南

の比恵那珂遺跡の発掘が進み、3世紀最大の都市だったことが分かってきました。

これらの分析結果を総合すると、邪馬壹(台)国は北部九州を中心とした地域に存在し、関門海峡付近から有明海沿岸にかけて広がる広域的な国家で、卑弥呼の宮城は博多湾岸にあった可能性が高いと考えられます。

もちろん、邪馬壹(台)国論争が完全に決着したわけではありません。新しい遺跡の発見や研究手法の進展によって、今後解釈が変わる可能性もあります。しかし、文献史学・考古学・科学的分析など多方面の成果を総合すると、邪馬壹(台)国九州説は、近年ますます説得力を増していると言えます。

本日は、このような最新の研究成果をもとに、邪馬壹(台)国と卑弥呼の実像について考察し、日本古代史の成り立ちを改めて見直す視点を提示しました。邪馬壹(台)国の研究は、今後の発掘調査や科学技術の進展によってさらに新しい展開を見せる可能性があり、日本古代史の理解を深める重要なテーマであるといえます。

*******質疑応答*******

◆邪馬台国の時代、日本には文字がなかったのですか。

当時すでに文字は存在し、使いこなす能力もあった可能性が高いと考えられます。卑弥呼が中国皇帝に使者を送り上表文を提出していることから、高度な文章作成能力があったと推定されます。ただし、日本は湿潤な気候のため木簡や文書などの有機物は朽ちて残りにくいという事情があります。そのため現在では、筆記具(硯)や鏡の銘文などから文字使用の痕跡を確認するしかありません。

◆神武東征と邪馬台国との関係や年代について。

神武東征は完全な神話とはとらえず、九州勢力が大和へ進出した歴史的事実を反映している可能性があると考えています。『古事記』『日本書紀』の天皇の長寿記録は、実際より誇張された「二倍年暦」であるとみなし、年代を逆算すると神武東征は紀元前ではなく1世紀頃と考えられます。また当時は、九州の武器形青銅器文化が東へ勢力を広げた時代とも重なります。そのような歴史的背景の中で、東方進出が起こった可能性があると思われます。

(正木裕氏 広報G 兵東勇)

